

児童期・青年期の精神的健康に関する心理学的研究（第13報）

～中国と日本の「一人っ子」の比較研究～

A Psychological Study on Mental Health of Child and Adolescent (13)
～ A comparative Study on the Only-one-child in China and Japan ～

羅 丹*・餅原尚子*・久留一郎**
Luo Dan・Takako Mochihara・Ichiro Hisadome

キーワード：心の健康・精神的健康・一人っ子・非一人っ子（2人以上の同胞）

はじめに

日本の少子化と中国の一人っ子政策は共に、「一人っ子」の問題を抱えている。「独り子は持たぬに劣る」という諺さえある。

これまで、中国と日本では「一人っ子」問題について、様々な研究がなされてきた。しかし、中国と日本という異文化の中では、社会環境から、家庭環境まで、多くの点で違いがある。

このような異環境下において、両国の「一人っ子」への心身の影響はどのような状況にあるのだろうか。また、中国の「一人っ子」と日本の「一人っ子」共に、「一人っ子」の特殊性を持っているが、両国の社会背景の差異により、彼らの心身の状況にはどのような違いがあるのだろうか。

このような問題は、21世紀という開放的、共通的環境（時代）の中で、国際的立場から考慮していく課題のように思われる。

I 問題

20世紀後半より、日本の核家族化傾向は急速に進み、同時に、高学歴化、都市化、高収入（経済）化が拍車をかけている。世帯分離による核家族の増加とともに、出生率の大幅な低下がクローズアップされている。鹿児島県の合計特殊出生率は、全国を常に上回っているものの、1990年が1.73（全国：1.54）、1997年は1.59（全国：1.39）と低水準で減少を続けている。

* 鹿児島大学教育学部附属教育実践研究指導センター・研究協力員

** 鹿児島大学教育学部治療心理学研究室

一方、人口が近々13億を越えるといわれる中国では、1970年末から、「一人っ子政策」を法的な育児政策と規定し、強力で押し進めている（農村地域と少数民族地域では、二人まで子どもを持つことが認められている）。結果、中国の一人っ子の比率は都市部において年々増え続けている。前例のないこの政策は世界中から注目され、さまざまな観点から問題視する声も多い。

特に、「一人っ子」の心の問題は、今後、社会構造にも影響を与えていくものと思われる。「一人っ子」の多い中国の児童生徒にとって、心理社会的状況（「一人っ子政策」など）はどのような影響を与えているのか、明らかにする必要がある。

「一人っ子」の生活環境は明確に複数子と異なる。この差異は、「一人っ子」にとって有利な面ともなり、不利な面にもなる。また、「一人っ子」の問題行動について、大人、つまり親や、学校や、社会などは彼らの特徴を十分考慮に入れ、適切な支援を行う必要がある。それが可能になれば「一人っ子」の弱点や、問題行動を避けることに成功する可能性もあると思われる。

「一人っ子」に関する研究において、さまざまな視点からの分析が行われているが、「一人っ子」自身が、「自分自身や環境、心身の状況をどのように認知しているのか」を目的とした研究は少ない（久留ら、1992）。そこで今回、われわれは、中国と日本の比較において、「一人っ子」自身が、自己の環境や心理・身体的状況等を如何に認知しているのかを明らかにし、心理学的側面からの考察と、若干の展望を試みた。

II 方 法

1. 調査対象

日本：鹿児島県の小学校6年生440名、中学校2年生388名、高校2年生485名（普通科225名、職業科260名）計1313名。サンプリングは、都市部、郡部、離島部にわたっている。

本調査の「一人っ子」は、72名であり、全体の5.5%である。

調査は、1999年7月に実施した。

中国：湖南省の小学校6年生310名、中学校2年生286名、高校2年生425名（普通科215名、職業科210名）計1012名。サンプリングは、都市部、郡部（離島部なし）にわたっている。

本調査の「一人っ子」は、591名であり、全体の58.4%である。

調査は、1999年10～11月に実施した。

2. 調査内容及び調査方法

① 調査内容と項目

日本学校保健会（1982）は、児童生徒の「心の健康」に関する調査を施行し、調査集計報告書を作成した。われわれは、その日本学校保健会作成のアンケートと全く同一の30項目を使用した。中

国・湖南省での調査は、同様のものを中国語に翻訳して実施した。

② 調査方法

本研究の調査は日本・鹿児島県（以下、鹿児島県の調査を「日本」と仮称する）、中国・湖南省（以下、湖南省の調査を「中国」と仮称する）共に、児童生徒に無記名で直接回答してもらった。行政機関等の協力により、回収率は、中国では概ね90%、日本では、ほぼ100%になった。

③ 集計方法

各設問ごとに、無効回答を除いて、SPSSを用い、全30項目について、クロス集計、 χ^2 検定を行った。

III 結 果

①全体、②一人っ子、③非一人っ子を学年別に分け、30項目を5領域：1.「自己および自己の環境の認知」、2.「自己の心理的状況の認知」、3.「自己の身体的状況の認知」、4.「心身の関係」、5.「自己や他者、未来に対する認知」に分け、特に「一人っ子」の心身の健康状況に視点をあて、中国と日本の比較分析を試みた。

表1 中国と日本の児童生徒の心身の状況の比較

	全 体				一人っ子				非一人っ子			
	小 学	中 学	高 校	全 体	小 学	中 学	高 校	全 体	小 学	中 学	高 校	全 体
自己及び自己の環境の認知												
Q1. 毎日の気分がよい	☆	☆	☆	☆	☆	☆	○	☆	☆	☆	☆	☆
Q2. 健康に自信がある	☆	☆	☆	☆	—	○	☆	☆	○	☆	☆	☆
Q3. 学校での生活が楽しい	○	☆	—	☆	—	—	○	☆	—	☆	—	—
Q4. 家での生活が楽しい	—	—	☆	☆	—	—	☆	—	—	—	☆	☆
Q5. 将来への心配がない	★	—	—	★	●	—	—	—	★	●	★	★

注1) 中国>日本 ☆ (危険率1%以下), ○ (1-5%), — (n.s.)

注2) 日本>中国 ★ (危険率1%以下), ● (1-5%), — (n.s.)

1. 自己および自己の環境の認知 (表1)

①全体

中国の児童生徒は日本に比較し、「毎日の気分がよく、健康に自信がある」と全学年の児童生徒が認知していることが明らかになった($P < 0.01$)。加えて、「学校での生活(小学、中学、全体)、家での生活(高校、全体)が楽しい」と受けとめていた($P < 0.05$)。

日本の児童生徒は、中国に比べ、「将来を心配してない(小学、全体)」ことが明らかになった($P < 0.01$)。中国の経済状況、就職状況は、日本以上に深刻であり、その煽りが児童生徒にも影響を与えているのかもしれない。

②一人っ子

中国の「一人っ子」は、日本のそれ比べ、「毎日の気分がよく(全学年)、健康に自信がある(中学、高校、全体)」「学校での生活が楽しい(高校、全体)」と認知している($P < 0.05$)。

中国の「一人っ子」は、家族から愛情を注がれ、自信に満ち、同じ「一人っ子」の友人が多くいる学校に楽しみを感じていることが明らかになった。周囲の多くが「一人っ子」であることから、自己および、自己の環境に対しては、肯定的に受けとめている。

一方、日本の「一人っ子」の数は少なく、「一人っ子」の多い中国に比べ、周囲は同胞を有する友人ばかりである。「一人っ子」は、「ナナメ」の人間関係を知らない状況(親-子という‘タテ’の関心の環境下)で人間関係をもつことになるため、対人関係がより敏感で、友達づくりも困難になりやすく、多くの人間関係をもたなければならない学校生活に対して、中国の「一人っ子」に比べ否定的感情が生じているのかもしれない。

全体的に、日本の「一人っ子」に比べ、中国の「一人っ子」の自己および自己の環境の認知は、positiveな様相を呈していることが明らかになった。特に高校生の「一人っ子」は、同世代(友人)の多い学校に人間関係を求め、楽しみ、安定を得ているように思われる。

むしろ、日本の「一人っ子」の方が、negativeに受けとめていることが明らかになった。

③非一人っ子

中国の「非一人っ子」は「毎日の気分がよく、健康に自信がある(全学年)」「家での生活は楽しい(高校、全体)が、将来が心配(全学年)」と認知していた($P < 0.05$)。

「非一人っ子」に関しても、中国の児童生徒は日本の児童生徒に比べ、将来を心配していることが明らかになった。就職難・フリーター志向のつよい日本であるが、中国の方がより深刻なのかもしれない。

2. 自己の心理的状況の認知 (表2)

①全体

中国の児童生徒は、「疲れやすく、なんとなくさびしい。食欲がなく、何をしても楽しくないし、何のために生きているのかわからない。悩みや心配ごとがある」が、「親友はいる」と、全学年の児童生徒が心理的不安を訴えていることが明らかになった($P < 0.05$)。加えて、「夜眠れないし、学校へ行きたくないし、すぐ不安になる(高校、全体)」という感情を抱いていることが明らかになった($P < 0.05$)。中国の高校生は、自己の心理的状況を、より深刻に受けとめているようである。

一方、日本の児童生徒は、「朝起きるのがつらい(全学年)。死んでしまいたい(中学、高校、全体)。夜、怖い夢をみる(中学、高校、全体)」という気持ちがつよい($P < 0.05$)。中国の児童生徒に比べ、希死感情がつよいのが日本の児童生徒の特徴である。その意味では、中国の児童生徒は不安感情がより強く、日本の児童生徒は、抑うつ感情がつよく現れているように思われる。

②一人っ子

中国の「一人っ子」は、「なんとなく寂しい(高校、全体)」「食事をしたくない(全学年)」「何をしても楽しくなく(小学、全体)、何のために生きているのかわからない(全体)」「悩みや心配ごとがある(小学、全体)」が、「親友はいる(全学年)」と認知している($P < 0.05$)。

一方、日本の「一人っ子」は、その逆であった。加えて、「朝起きるのがつらい(小学、高校、全体)」ようである($P < 0.05$)。

表2 中国と日本の児童生徒の心身の状況の比較

自己の心理的状況の認知	全 体				一人っ子				非一人っ子			
	小 学	中 学	高 校	全 体	小 学	中 学	高 校	全 体	小 学	中 学	高 校	全 体
Q 6. 疲れやすい	☆	☆	☆	☆	—	—	—	—	☆	☆	☆	☆
Q 7. 夜、眠れない	—	—	☆	☆	—	—	—	—	—	☆	☆	☆
Q 8. なんとなく寂しい	☆	☆	☆	☆	—	—	☆	☆	☆	☆	☆	☆
Q 9. 朝起きるのがつらい	★	★	★	★	★	—	●	★	★	★	★	★
Q10. 学校へ行きたくない	—	—	☆	○	—	—	—	—	—	—	☆	☆
Q11. 食事をしたくない	☆	☆	☆	☆	☆	☆	○	☆	☆	☆	☆	☆
Q12. すぐ不安になる	—	—	☆	☆	—	—	—	—	○	☆	☆	☆
Q13. 何をしても楽しくない	☆	☆	☆	☆	○	—	—	☆	☆	☆	☆	☆
Q14. 何の為に生きているのかわからない	☆	○	☆	☆	—	—	—	○	☆	☆	☆	☆
Q15. 死んでしまいたい	—	★	★	★	—	—	—	—	—	★	★	★
Q16. 悩みや心配ごとがある	☆	☆	☆	☆	☆	—	—	☆	☆	☆	☆	☆
Q16-3b. 親友がいる	☆	☆	☆	☆	☆	☆	○	☆	—	☆	☆	☆
Q17. 夜、こわい夢を見る	—	●	●	★	—	—	—	—	—	—	★	★

注1) 中国>日本 ☆ (危険率1%以下), ○ (1-5%), — (n.s.)

注2) 日本>中国 ★ (危険率1%以下), ● (1-5%), — (n.s.)

中国の「一人っ子」は、日本の「一人っ子」より、孤独感、食欲不振、抑うつ感情、悩みや心配ごとなどを強く有していた。ところが、中国国内の比較をしてみると、「非一人っ子」の方がむしろ、より深刻であることが明らかになった(羅、2001)。換言すれば、中国においては、「非一人っ子」より、「一人っ子」の方が、より健康に成長していた。

中国では「一人っ子政策」を実施して、20年が経過した。この政策を実施後、様々な修正、補足

制度を充実しながら全国に広げてきた。80年代中期に入り、中国国民は「一人っ子政策」を国の法律として受けとめていった。この政策は当初の強制的実施から、一人一人の自覚へ変化してきた。親たちは、子育てや家庭教育に対して、子どもの知的発達のみならず、感性的発達(例えば、道徳、社会性、自立性など)にも力を注ぐようになっていった。また、「一人っ子政策」により、都市部の「一人っ子」の比率は、農村部より、かなり高いことは事実である。「一人っ子」の家庭の多く

は小家族であり、家庭の経済力、日常生活、文化生活は、複数子の家庭より豊かで、よりよい教育を受ける機会が多い。従って、彼らの心理的な面も、より健康的に育っているのかもしれない。

③非一人っ子

中国の「非一人っ子」は日本に比べ、「疲れやすい(全学年)、夜眠れない(中学、高校、全体)、なんとなく寂しい(全学年)、学校へ行きたくない(高校、全体)、食事をしたくない(全学年)、すぐ不安になる(全学年)、何をしても楽しくない(全学年)、何のために生きているのかわからない(全学年)、悩みや心配ごとがある(全学年)」が、「親友はいる(中学、高校、全体)」ということが明らかになった(P<0.05)。

一方、日本の「非一人っ子」は中国に比べ、「朝起きるのがつらく(全学年)、死んでしまいたいと思うことがある(中学、高校、全体)」「夜、怖い夢をみる(高校、全体)」と認知していた(P<0.01)。このように中国の「非一人っ子」は、negativeな面において、目覚ましく不健康な傾向を示した。

全体的に、日本に比較して中国の児童生徒は、自己の心理的状况を不健康に意味づけている。ま

た、その傾向は、「非一人っ子」に強くみられる。

一方、日本の「非一人っ子」の、自殺念慮の高さは気になるところである。

ここで、中国の児童生徒、特に「非一人っ子」の方が、全学年にわたり孤独感を強く抱いている点に注目してみたい。その一方で、「Q16-3b:親友がいる」と答えている中国の「一人っ子」、「非一人っ子」ともに、日本の同群に比べて、有意に高く認められている(P<0.05)。親友がいるにもかかわらず、孤独感を強く抱いている彼らの“親友”は「真の親友」であるのか、あるいは表面的な、遊ぶ時だけの“親友”なのか、疑問が残る。おそらく、中国の児童生徒の人間関係は、日本の児童生徒のそれより、希薄化しているのではないだろうか。

3. 自己の身体的状況の認知 (表3)

①全体

全体的に、日本の児童生徒に比較し、中国の児童生徒の方が、心氣的傾向がつよいことが明らかになった。特に、「腹痛や頭痛(小学、高校、全体)、下痢や便秘(全学年)」は、かなりの児童生徒にみられる(P<0.01)。

表3 中国と日本の児童生徒の心身の状況の比較

自己の身体的状況の認知	全 体				一 人 っ 子				非一人っ子			
	小 学	中 学	高 校	全 体	小 学	中 学	高 校	全 体	小 学	中 学	高 校	全 体
Q18. 動悸、胸が苦しくなる	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Q19. お腹や頭が痛くなる	☆	—	☆	☆	—	—	○	○	☆	—	☆	☆
Q20. めまいや立ちくらみ	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	☆
Q21. 手足のしびれや冷感	—	—	☆	—	—	—	—	—	—	○	○	○
Q22. 下痢や便秘になる	☆	☆	☆	☆	○	—	—	○	☆	○	☆	☆

注1) 中国>日本 ☆ (危険率1%以下), ○ (1-5%), — (n. s.)

注2) 日本>中国 ★ (危険率1%以下), ● (1-5%), — (n. s.)

②一人っ子

中国の「一人っ子」は、日本の「一人っ子」に比べ、「腹痛や頭痛 (高校、全体)、下痢や便秘になる (小学、全体)」傾向が認められた ($P < 0.05$)。自己の身体的状況の認知に関しては、日本の児童生徒よりも、中国の「一人っ子」の方が、より身体的不調を訴えやすいことがうかがわれる。身体に表現される不定愁訴の背景には、心理的問題が反映しており、心理的葛藤や、さまざまなストレス状況が示唆される。この傾向は、「非一人っ子」に、より顕著であった。

③非一人っ子

中国の「非一人っ子」は、日本の「非一人っ子」に比べ、「腹痛や頭痛 (小学、高校、全体)、めまいや立ちくらみ (全体)、手足のしびれや冷感 (中学、高校、全体)、下痢や便秘になる (全学年)」ことが明らかになった ($P < 0.05$)。

日本は経済大国であり、高度な物質文明により、国民の生活も中国に比べ豊かであり、医療、保健制度も整備されている。日本の児童生徒の外部の生活条件は中国の児童生徒より有利である (例えば、栄養の良さや、生活環境など)。一方、中国の「一人っ子政策」下では、「非一人っ子」を持つ家庭の多くは農村部という経済力が弱い少数民族

地区である。このような両国の客観条件、特に中国において、主に都市部に住む「一人っ子」と、主に郡部に住む「非一人っ子」の差異から、中国の児童生徒 (「一人っ子」、「非一人っ子」) への身体的健康にも影響を与えていると思われる。

4. 心身の関係 (表4)

①全体

全学年において、中国の児童生徒は、日本に比べ、心身の病気を心配していることが明らかになった ($P < 0.01$)。日本では、15年前に比べ、児童生徒の心の健康問題の深刻さが明らかになったが (久留ら、2001)、それ以上に中国の児童生徒の心身の状況は重篤であり、早期危機介入の必要性が問われているように思われる。

②一人っ子

中国の「一人っ子」は日本の「一人っ子」に比較し、「体の病気 (中学、全体)、心の病気 (小学、全体) を心配している」ことが認められた ($P < 0.05$)。

精神と身体は「表裏一体」の関係であり、「心身一如」の言葉にも表現されているとおりである。人間の身体器官は「意味器官」としてのメカニズムを有する、とフランクルは述べている。今回の

表4 中国と日本の児童生徒の心身の状況の比較

心身の関係	全 体				一人っ子				非一人っ子			
	小 学	中 学	高 校	全 体	小 学	中 学	高 校	全 体	小 学	中 学	高 校	全 体
Q23. 体の病気が心配	☆	☆	☆	☆	—	○	—	○	☆	☆	☆	☆
Q24. 心の病気が心配	☆	☆	☆	☆	○	—	—	○	☆	☆	☆	☆

注1) 中国>日本 ☆ (危険率1%以下), ○ (1-5%), — (n.s.)

注2) 日本>中国 ★ (危険率1%以下), ● (1-5%), — (n.s.)

調査結果で、日本の「一人っ子」は、中国の「一人っ子」に比べ、心身共に健康な傾向を示したことから、中国の社会環境（特に、児童生徒への人的、物的支援システムの乏しさなど）は、児童生徒の心身の発達へかなり影響を与えているように思われる。

中国では、心理学（特に、臨床心理学）、精神医学の領域の発展とともに、人的資源（臨床心理士などのスクールカウンセラー）の充実が求められる時であろう。

③非一人っ子

中国の「非一人っ子」は、全学年において、「体の病気や、心の病気への心配」が非常に強いことが認められた(P<0.01)。

日本に比べ、中国の児童生徒は、心身ともに不健康であるという認知をしており、それは、特に「非一人っ子」に強く認められた。

郡部に多い中国の「非一人っ子」の心身の健康状況は、不健康な傾向にあることから、人的、物的配慮は、「一人っ子」のみならず児童生徒全体

に対して見直すべきであろう。

中国では、「一人っ子政策」を実施後、マイナス面の影響をなるべく小さくするため、家庭、学校、社会全体から、いろいろな配慮が考えられた。中国政府の全般的運営方針によれば、健康な「一人っ子」を育てるのに必要な人的、物的資源を最大限に充実させている。一方、「一人っ子政策」により、二人以上の子どもを持つ家庭は、多くは農村地区、少数民族自治区に集中することになった。このような地区は、まだ未開拓で、地区の経済力も全国の平均以下である。従って、この地区に住む家族は、家庭の経済力や、両親の教育的素質などの面で、「一人っ子」の家庭より低い。このような社会的、家庭的不利な要因の存在は、「非一人っ子」たちの心の健康にも影響を与え、心身の症状となって現れやすいものと思われる。

5. 他者や未来に対する認知（表5）

①全体

全学年において、中国の児童生徒は、「父母と意見が合わず、早く大人になりたい」と思ってい

表5 中国と日本の児童生徒の心身の状況の比較

他者や未来に対する認知	全 体				一 人 っ 子				非一人っ子			
	小 学	中 学	高 校	全 体	小 学	中 学	高 校	全 体	小 学	中 学	高 校	全 体
Q25.父母と意見が合わない	☆	☆	☆	☆	☆	☆	—	☆	☆	☆	☆	☆
Q26.早く大人になりたい	☆	☆	☆	☆	☆	☆	—	☆	☆	☆	☆	☆
Q27.家を出て遠くへ行きたい	★	○	★	★	—	—	●	—	○	—	★	—
Q28.親に反抗したい	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★
Q29.先生に反抗したい	★	★	★	★	●	★	★	★	●	★	★	★
Q30.悩みや心配事の相談をした	☆	☆	☆	☆	☆	☆	—	☆	☆	☆	☆	☆

注1) 中国>日本 ☆ (危険率1%以下), ○ (1-5%), — (n.s.)

注2) 日本>中国 ★ (危険率1%以下), ● (1-5%), — (n.s.)

た ($P < 0.01$)。加えて「悩みや心配事の相談をした」ことのある児童生徒が日本よりも多かった ($P < 0.01$)。また、中国の中学生は、「家を出て遠くへ行きたい」とも思っていた ($P < 0.05$)。「望子成龍 (龍のように立派な子に育ててほしいと願うこと)」の教育観のつよい中国の児童生徒にとっては、自分らしさの主張との衝突が生じているのかもしれない。また、自己表明の苦手な日本に比べ、中国の児童生徒は、悩みや心配ごとを気軽に相談しているようである。

②一人っ子

中国の「一人っ子」は、日本に比べ、「父母と意見が合わず (小学、中学、全体)、早く大人になりたい (小学、中学、全体)」と思っている ($P < 0.01$)。また、「悩みや心配事の相談をした」経験も多い ($P < 0.01$)。

一方、日本の「一人っ子」は、「親や先生に反抗したい (全学年)」と思っている児童生徒がかなり多いことが明らかになった ($P < 0.05$)。

「父母と意見が合わないこと」の具体的な内容について、テレビ番組の選び方、友達の選び方、電話の掛け方、言葉の使い方、異性の友達のことや進学や受験のことなどの内容を選んだ中国の児童生徒は、日本より有意に多く見られた (羅、2001)。中国の伝統的な家長制度は、今でも家族関係の中に現れている。また、中国の親たちは、子どもに対する期待が高く、特に60年代の文化大革命の影響を受けた「文革世代」の親たちは、自分が実現できなかった大学進学の夢を我が子に託している。家では、勉強以外のことは子どもにはさせないという家庭が多い。例えば、簡単な家事や、子どもが自分でできる簡単な労働もほとんどさせない。さらに、勉強と無関係なこと、例えば、テレビや、友達との遊びなども、制限されている。中国の家庭では、「よい子」の基準は親に対する「言聴計従」である。つまり、子どもは親の言ったこと、親が選んだ人生の目標に絶対に従う子が「よい子」なのである。

親の過剰な干渉、期待を受けた子どもは、自我形成の段階で、自己決定や自己選択 (例えば、テレビ番組の選び方、電話の掛け方、言葉の使い方、

異性の友達のことや友達の選び方など) を剥奪されている。さらに、中国の児童生徒は、進学や受験のことなどで、親との意見が合わないことが最も多かった。しかし、「親や先生に反抗したい」ことについては、日本の方がはるかに多かった。

③非一人っ子

「非一人っ子」においても、中国、日本ともに「一人っ子」と同様の傾向がみられた。ただ、「家を出て遠くへ行きたい」に関しては、中国では小学生、日本では、高校生の「非一人っ子」につよく認められた ($P < 0.05$)。

全体的に中国の児童生徒には、自立心のつよさが伺われた。一方、日本の児童生徒は、自己の感情を抑圧しやすく、内面世界には反発心、反抗心をつよく有していることが示唆された。

IV 考察と展望

従来の日本での研究では、「一人っ子」は、協調性がなく、孤独感が強く、両親も過保護、過干渉的になりやすく、分離も困難などと問題が挙げられていた (依田、1967; 吉田、1987)。しかし、今回の結果から見ると、中国の「一人っ子」は、「非一人っ子」より健康であったことが幾分か認められた。調査対象となった中国の「一人っ子」は、「非一人っ子」より優れた面がいくつか見られたように、家庭、学校、社会などの連携によって、「一人っ子」はより健康に育てている。一方で、「非一人っ子」は、より不健康であった。この結果の示す意味は、中国の「一人っ子」の心身の健康状況は改善したが、「非一人っ子」の児童生徒には、多くの精神的問題が潜在しているのではないかと推測される。また、兄弟の有無にかかわらず、様々な社会病理現象の中で、心理的不適応状況を呈している人間もいるのも事実である。

一方、中国と日本の比較をみると、両国の「一人っ子」において、日本の「一人っ子」の心身の健康状況は、中国の「一人っ子」より、健康な傾向が認められた。このような両国の「一人っ子」の問題は、単に個人的な問題に限らず、両国の現代社会の価値観、人生観による人間の個別的、独自の生き方が反映されている。また、もう一つ

忘れてはならない社会背景は、中国の「一人っ子」はほとんどが「一人っ子政策」における「一人っ子」であり、日本の「一人っ子」は高度な物質文明社会の「少子化現象」における「一人っ子」であることである。これは育児環境の大きな違いの一つである。このような社会背景の差異は、両国の子ども、特に「一人っ子」に、大きな影響を与えるものと思われる。

さらに、中国の「非一人っ子」の心身の健康状況は、日本の「非一人っ子」より、目覚ましく不健康な傾向を示した。中国の「非一人っ子」にとって、周囲が「一人っ子」ばかりであることから、「なぜ自分だけ‘一人っ子’じゃないの？」という孤立感が生じるかもしれない。逆に、日本の社会は、「一人っ子政策」を実施しておらず、多くの家庭には、複数の子どもがいる。「非一人っ子」という言い方も必要がないかもしれない。日本では、中国とは逆に、「一人っ子」は幾分か特別なニュアンスをもたれやすい。このように、社会、家庭環境の差異から見ると、中国の「特例」の「非一人っ子」に比べ、日本の「非一人っ子」は、より健康な生活を送っているのが当然であろう。

日本でも、中国でも、現代の児童生徒の精神をとりまく心理社会的環境は、必ずしも良好であるとは言いがたい。また、中国と日本ともに、身体的不調を訴え、現実逃避的に興味や関心さえも喪失した抑鬱的、神経症的な児童生徒は多く存在している。児童生徒の精神的状況は十分に健康的であると言いがたい。われわれ臨床援助者は、彼らの心理的世界を適切に認識することは大切なことであるが、さらに重要なことは、児童生徒から信頼され、相談をもちかけられるような「大人」として存在することである。児童生徒は、真に自分を受容してくれる「大人」に出会った時、率直に自分の気持ちを表明するものである。このような真実の関係の中で、語り合い、語りつくすことによって、よりよく生きたいという自己実現的な生き方がわき出てくるのである。特に、様々な社会状況下における「一人っ子」が、心身共により健康に育っていくには、親や、学校だけの責任ではなく、「一人っ子」を取り巻く行政の専門機関、病院、保健所、児童相談所、地域社会など社会的資源と

の連携が必要であろう。

われわれ大人たちが、「一人っ子」の特徴を踏まえ、有利なところを活かし、不利なところを克服すれば、「一人っ子」でも他の子どもと同じように社会に適応が可能になると思われる。「一人っ子」への心理的援助とともに、「非一人っ子」への援助のアプローチも考えなければならない。

中国の経済発展と共に、「一人っ子政策」は一時（一世帯）の政策であり、中国の人口の移り変わりにより、2010年頃、この政策の調整が開始される。

今後の課題としては、その時代にいる「一人っ子」の心身の健康状況がどのように変化していくのか検討すべきであると思われる。同時に、日本の「少子化現象」により、「一人っ子」の心身の健康状況はどう変化していくのか、また、時代の変化と共に、中国と日本の「一人っ子」の心の健康への配慮はどうあるべきかについて、継続して検討する必要があるであろう。

参考文献

- 依田 明 1967 ひとりっこ・すえっこ 大日本図書 92-99
- 久留一郎・小松瑞代・南利枝・餅原尚子 1992 児童期・青年期の精神的健康に関する心理学的研究（Ⅷ）～一人っ子の心身状況（Cross Analysis）～ 小児保健かごしま第5号 42-47
- 久留一郎 1989 児童生徒の精神健康 丸井文男 監修 人間発達と心理臨床 協同出版 132-134
- 久留一郎・餅原尚子・石原千草・森吉里奈・羅丹 2001 児童期・青年期の精神健康に関する心理学的研究（第11報） 鹿児島大学教育学部研究紀要第52巻 173-224
- 吉田俊和 1987 兄弟関係の心理 長田雅喜編 家族関係の社会心理学 福村出版
- 羅丹 2001 児童生徒（一人っ子）の心の健康に関する臨床心理学的研究（鹿児島大学大学院教育学研究科修士論文）